バークレー宗教学講義顛末

松岡　秀明

「2週間以内にシラバスを送ってください。それを見て秋学期に採用するかどうかを決めます。」カリフォルニア大学バークレー校のエルム教授は私にそう言い渡した(*)。エルム教授は中世キリスト教を専門とする歴史学科の教授だが，宗教学科の主任でもある。同校人類学科の大学院に籍を置いて東京で博士論文を書いていた私は，その進行状況を指導教官たちに報告するために2000年4月にバークレーを訪れた。宗教学科ではTA（Teaching Assistant：教授の補佐として学部学生に教えたり，試験の採点をする院生）を募集しているから主任教授と直接会ってみればという友人の院生のアドバイスに従って，その折にエルム教授の研究室を訪れたのである。

教授は「いつ博士論文を提出するつもりですか」と聞いてきた。私が「10月くらいを考えています」と答えると，教授はさらにどんなことを教えられるかと質問した。私が講義のタイトルをいくつか話すと，教授は「秋学期の公式の始まりまでに提出すれば，TAではなく講師として教えられる可能性があります」と言った。この願ってもない話にびっくりした私は，「秋学期の公式の始まりっていつですか？」と鸚鵡返しに尋ねていた。教授は私に「8月中旬のはずですが，正確な日付は事務で確認してください」と告げた。是非教えたいので期限までに博士論文を提出できるよう最善を尽くす旨教授に伝え，私は研究室を後にした。

この日から今（2000年12月）にいたるまで目の回るような忙しさが続いているが，同時にここ数年来経験しなかった充実感も味わっている。バークレーで宗教学を教えるという青天の霹靂のようなこの話こそ，博士論文の筆がなかなか進まず，無力感を感じ苛立っていた私の「一人空しくビスケットの／しけってる日々」（草野ムネマサ）に終止符を打つ契機だった。

ともかくも博士論文を8月21日までに提出しなければいけない。まず草稿を書き上げ，それを島薗先生に紹介していただいたカナダから宗教学科へ留学して創価学会を研究しているレヴィ・マクラクリン君に目を通してもらって文法的に問題があったり言い回しがおかしい箇所を書き改めることにした。たんに校正にとどまらず，貴重な意見をくれた彼にはたいへん感謝している。いいエディターに巡り合うことは容易ではないが，この出会いは幸運だった。

予定より早く論文を仕上げねばならなくなったために，依頼されていたいくつかの論文の締切りを守れずに大幅に遅れて書き上げることになり，諸先生方には大きなご迷惑をおかけした。さらに，研究室でレヴィと二人で校正を行なう場合もあり，学生のみなさんにご迷惑をおかけしたとしたら，この場をお借りしてお詫びしたい。

博士論文は6月中旬に一通り書きあがった。それを3人の指導教官に郵送して意見をいただき，それに従って手を入れ，7月31日にバークレーへと発った。8月8日，3人の指導教官からサインをもらってその日の受付が終わる10分前に学位係に博士論文を提出した。事務官は，「おめでとう」といって提出を証明する書類と一緒にfinishedとPh.D.掛けてもじったPhinishedDというラベルが貼ってあるロリポップ（棒付きのキャラメル）を私に手渡した。博士論文提出者にキャラメルをくれるというレイドバックさ（お気楽さ）がいかにもバークレーだ(**)。翌日，証明書を別の事務へ提出し，ようやく8月末から始まる宗教学科での講義を担当することが決まった。

宗教学科と書いたが，バークレーの宗教学は正式には学科（department）ではない。かつて宗教学科をつくろうとベラーたちが尽力したが，キャンパスのすぐ北には宗教者を養成する大学院大学

である神学校大学院連合 (Graduate Theological Union)—島田勝巳君が2001年4月から天理大学で教鞭をとられるまで在籍していた—があることもあり実現しなかった，という話を聞いたことがある(***)。そこで，歴史学，古典，人類学などの教官が委員会を作り，宗教学のプログラムを運営しているのである。必要な単位をとれば，学生は学部での専攻を宗教学として卒業することができる。

しかし，宗教学のカリキュラムが必ずしもうまく構成されているとは思えない。主として学部1年生を対象にして行なわれている『宗教学入門』と銘打った講義は Religion, gender, and society in the Muslim Middle East というタイトルどおりイスラムにおけるジェンダーを扱ったものであり，『入門』としては適切さを欠くように思えた。事実，その講義の2人のＴＡに聞いてみると，当惑している学生がかなりいるということだった。やはり宗教学の基礎概念を扱うような講義が必要であろう。他には，中世ユダヤ教，ヒンドゥー教の神話学，古代バビロニアの宗教等々についての講義があった。一方，他学科で開講されている科目でも宗教関連のもので宗教学の単位とすることが認められているものがある。たとえば，社会学科の宗教社会学や，歴史学科での中世キリスト教史，南アジア学科でのインドの諸宗教についての講義がそれにあたる。

Japanese Religion: Transformations in These Two Centuries (1800-2000) というタイトルで，私は学部生に対して日本の近代化と宗教の変容について講義した。シラバスをつくるときに気づいたことだが，現在入手可能な本のなかには日本宗教についての英語での適切な—少なくとも私の問題関心にとって—通史がない。エアハート訳で1980年に東大出版会から出た村上重良の *Japanese Religion in the Modern Century* を用いたかったのだが絶版となっているため，必要な章を本の一部や論文をコピーして製本したコースリーダーと称されるものに入れることにした。通史としてはこの村上と Kitagawa, *Religion in Japanese History* (1990) を用いた。以下，講義で用いた単行本をあげておく。Bellah, *Tokugawa Religion* ([1957] 1985), Davis, *Dojo* (1980), Hardacre, *Kurozumikyo and the New Religions of Japan* (1988), *Marketing the Menacing Fetus in Japan* (1990), Lifton, *Destroying the World to Save it* (1999), Ooms, *Women and Millenarian Protest in Meiji Japan* (1993), Reader, *Religion in Contemporary Japan* (1991)。以上，日本近現代の宗教研究にとってはほとんどがお馴染みのものである。さらに，先に述べたコースリーダーにはウェーバーの所謂『プロ倫』の数章から1990年代の論文にいたる文献を収めた。

8月末の最初の講義には30人以上の学生がやって来て，床に座っている学生も出る始末だった。教室の大きさの関係から受講者の定員が26名となっていたため，当惑した私は学生の数が減るようにと，「宗教学の知識，日本文化の知識のいずれもない学生にはちょっと難しいかもしれません」と説明したが，いい成績をとることに躍起になっている学生たちに対してこの発言は効果がありすぎて次の講義に現われた学生は10人程度まで減ってしまった。後で事務に聞いたら人数が多い場合は教室を代えることは可能だったそうで，私の心配は杞憂だったわけだ。学生の数が減ったのをいいことに，討論がより活発にできるように講義とセミナーの折衷形式にした。週2回火曜と木曜の11時から12時半までの1時間半の講義のうち1回は学生に発表してもらい，その後の時間をディスカッションに充てた。アメリカの大学生はよく勉強するといわれる。これは事実だが，勉強をしないといい成績はとれないような仕組みになっているからであり，勉強が楽しくて自分から意欲をもって勉強している学生の比率は日本とそうかわりないのではないか。幸い私の講義を受講した学生の何人かは熱心に勉強しており活発に質問してくれて，講義する側としても刺激を受けた。

日本と異なりアメリカではほとんどの大学生は現役で入学するが，私の講義には他の学生と少々異なった学生が二人いた。一人は50才台の女性で，彼女は日本人が親戚にいるので日本文化に興味を持って私の講義をとったとのことだった。また，バークレーは他大学との単位相互認定制度があるが，近くのキリスト教系の大学から優秀な学

生が一人参加していた。ある日私が教室へ入ると赤ん坊が入れられた乳母車があるではないか。彼女は「すいません。ベビーシッターが急病なんです。この子ここに置いてもいいですか」と言う。断るわけ訳にいはいかない。講義の後で，彼女は離婚して子供は自分が引き取って育てている旨聞いた。私はこの日，三世代に亘る年齢の人たちの前で講義したことになる。

さて，学生にとっては最も気になる成績だが，出席，発表，中間および期末試験で採点した。結果は良好で不合格は一人もなかった。12月末で東京に戻る予定でいたが，2001年1月から春学期に，先述のGTUで院生を対象としてHeaven and Hell in Japanese Religiosityというゼミを行なうことになった。アメリカの大学での就職やポスト・ドク（新Ph.D.取得者が1－2年間，研究に専念できるポスト）にもいくつか応募しているので，読者諸賢が拙文を読まれている頃には2001年秋からの居場所が決まっていることであろう。

註

(*) カリフォルニア大学バークレー校は1868年，UCLAなど九つあるカリフォルニア大学のなかで最初に創立された。日本では時にカリフォルニア州立大学（California State University）と混同される。カリフォルニア大学も州立大学だが，両者は全く別のものである。

(**) ヒッピー発祥の地として知られるバークレーは，全米で最もリベラルな都市と見なされている。多くの教官はノータイ・ノージャケットで教室に現われ，時にはジーンズで講義をする教官もいる。校舎もほとんどが鉄筋コンクリートのビルである。11月に講演をするために初めてハーバード大学を訪れたが，バークレーとのあまりの違いに驚いた。大雑把に言えば，ハーバードは非常にフォーマルなのである。煉瓦造りで回廊にヴィクトリア調の絵画が掛けられたハーバードの建物を巡るにつけ，『檸檬』を書いた梶井基次郎の如き気持ちになった。

(***) もっともこのエピソードはいささか神話化されているかもしれない。